



インドネシア

BOP層家庭訪問調査レポート

- 調査実施日：2014年1月29日
- 調査場所：スラバヤ市ドゥクパキス地区
- 調査対象：ヘンディ(仮名)さんの一家
- 換算レート：100インドネシアルピア≒0.86円(2013年11月末)



ヘンディさんの一家



家族構成	ヘンディ(仮名) 31歳 妻(バリ人とジャワ人の混血)、 息子(小学校2年生)
世帯収入	130万ルピア
職業	警備員

ヘンディさんについて

バリ州デンパサール市の出身で、親と共に1988年からスラバヤ市に住んでいる。一般にバリ人はヒンドゥー教徒が多いが、彼自身はキリスト教徒である。スラバヤの高校を卒業した後、運送会社の倉庫番などを務めて、今は警備員の仕事をしている。

バリ人とジャワ人の混血の妻とは2004年に結婚し、今は小学校2年生の息子と3人家族で暮らしている。

世帯収入

ヘンディ氏は警備員として、毎月130万ルピアの収入を得ている。妻は家で子供の世話をしており、ヘンディ氏の収入が世帯収入となっている。今のところ、この収入がすべてだが、本当に困ったときには、親から資金援助を受けているとのことである。



住居

長屋の一角に居住

ヘンディ氏とその家族は、表通りから小さい路地を入ったところの8世帯が住む長屋の一角に住んでいる。住み始めたのは2002年からで、毎月30万ルピアの家賃を払う。部屋は4畳半程度の一部屋のみで、部屋の外の軒の部分で、調理をしたり、洗濯物を干したりしている。

部屋の中には、家族3人が寝るベッドが置かれ、それが部屋のほとんどを専有している。それ以外に、テレビ、冷蔵庫、炊飯器、タンスなどが置かれ、動けるスペースはほとんどない。

部屋のなかのテレビは5年前に新品をクレジットで買ったものである。



家の入口と軒。軒も家の一部



軒部分の右側に置かれた棚やコンロ



部屋の中。ベッドが大半を占める



冷蔵庫の中

冷蔵庫は、もともとは隣の家の人が買ったものだが、使わないということで、お金を払って譲ってもらったそうである。冷蔵庫の中身を見せてもらったが、水以外はほとんど何も入っていなかった。

家電製品など

前述のように、テレビは5年前に新品を買ったもので、冷蔵庫は隣の住人から譲ってもらった。バイクは5年前に友人から中古を500万ルピアで買ったが、その際には支払いを2回に分け、親からも資金援助してもらった。



5年前に買ったバイク

電気、水道など

電気や水道料金は、3世帯合同で支払う。すなわち、メーターがひとつしかないの、それを3等分して払う形である。電気は国営電気会社(PLN)、水道はスラバヤ市水道局(PDAM)から供給されている。毎月の支払額は、電気と水道を合わせて15万ルピア程度である。

なお、この長屋の住人たちは、1年に1回の帰省用の資金を作るために、互助会的な組織を作っている。そこでは毎月5万ルピアまたは10万ルピアを積み立て、年末にそれら11ヵ月分を各世帯へ返却する。この資金は少額の貸しつけにも使われる。

このほか、毎月必ず支払う費用としては、町内会費(5000ルピア)とゴミ処理代(7000ルピア)がある。さらに、教会の信者が亡くなった際には1万ルピアを拠出する。



←電気メーター。ここに示された数字に基づく支払いを3世帯で分ける



長屋の中に3世帯が並ぶ

JETRO



食事

質素な食事

ヘンディ氏の家には、台所らしき部分はコンロが置いてあるのみである。このコンロの下にプロパンガス(3キロのボンベ)があり、妻が調理をする。食事は毎朝作ってそれで1日もたせ、夕食は作らない。ご飯は朝炊いたものを炊飯器に入れたまま、夜まで保温する。コンロのまわりには、食材らしきものはほとんど見当たらなかったが、調味料や小さく切ったトマトのかけらがあった。



食事は質素で、野菜、豆腐、テンペ、卵など有り合わせのもので、スープなどを作る。食材は、毎朝5時半～7時頃に来る行商人から買う。市場へ出かけることはない。毎日の食費におおよそ3万ルピア程度かかっている。

路地の先には、様々な物売りや屋台がやってくるので、そこで買い食いすることもよくあるようである。

← ガスコンロ。その隣には、洗った食器や洗濯物が置かれていた



時間

生活リズム

ヘンディ氏は、警備員という職業上、不規則な生活をしている。

たとえば、1週間のうち、月・火は夜勤(23時～7時)、水・木は夕勤(15時～23時)、金・土は昼勤(7時～15時)で、日曜日は休み、といった形である。日曜日には家族揃って教会へ行く。

妻は朝6時半頃起きて、食事を作り、子供を学校へ送り出した後は、洗濯をしたり、掃除をしたりしている。

息子は、朝7時に起きる。午前10時～午後1時が学校であるが、毎日、朝食を済ませてすぐ、学校へ行く前の朝7時半～8時半に個人塾へ通っている。時間が合えば、ヘンディ氏が息子を塾まで送っていく。

訪問後の感想：ヘンディ氏は、一部屋のみ之家に10年以上住んできた。収入が少ないため、家計のやりくりは大変だが、それでも息子を個人塾に通わせている。そこには、息子には自分以上の学歴を持たせたいという、親としての願いが現れている。

ヘンディ氏の住む長屋の住人は皆、10年以上そこに暮らしてきた人々で、生活が急速に良くなって長屋を離れていく、という現象が起こっているようには見えなかった。「近年、とくにモノの値段が上がっているので大変だ」と妻と二人で何度も繰り返したヘンディ氏だが、収入が増える当てはない。妻も息子の面倒を見続ける間は、なかなか仕事を探すこともできないだろう。

ヘンディ氏のケースのように、毎月の収入が100米ドル程度の人々の家には、余計なモノがほとんどない。食材も毎回使い切るケースが多く、冷蔵庫を食材の貯蔵に使っている事例はほとんどなかった。食事もあり合わせのものであり、栄養のバランスなどを考えられる余裕は見受けられなかった。

BOP層のマーケットを考える際に、こうした必要最低限の消費しか行えない層にどのようにアプローチするか、あるいはそのような層はマーケティング対象から外すという選択肢になるのか、現実的に即して考察することが必要となる。

息子にはいい教育を受けさせたい。自分が高校卒なので、高校卒以上、できれば大学卒になってほしいと願っている。



JETRO

【免責事項】本レポートで提供している情報は、ご利用される方のご判断・責任においてご使用ください。ジェトロでは、できるだけ正確な情報の提供を心掛けておりますが、本レポートで提供した内容に関連して、ご利用される方が不利益等を被る事態が生じたとしても、ジェトロ及び執筆者は一切の責任を負いかねますので、ご了承ください。